

William E. Leuchtenburg,

Progressivism and Imperialism;

The Progressive Movement and
American Foreign Policy, 1898
—1916(The Mississippi Valley Historical
Review vol XXXIX No 3.
1952)

現世紀のアメリカを理解する一つの重要な鍵が、一九世紀末から二〇世紀初頭にかけて起つた革新主義プロGRESSIVISMの伝統であることは、吾国に於いても夙に高木八尺氏の指摘されたところであつた。そして革新主義運動の研究は主としてそれ自体として、即ちアメリカ独自の内政問題としてなされて来た。しかし吾々はまた、この運動の起つた時期が、アメリカ帝国主義の華々しい展開期であり、又運動の反独占闘争の輝かしい指導者とされるT・ルーゾベルトが、同時に積極的な帝国主義外交の推進者であつたという事実を直面せざるを得ない。ここに革新主義を、その対外的側面

から一応切り離して考察してきており、ただか革新主義者の大半はルーゾベルト外交には反対であつたとするに過ぎない従来の研究に不満を感じられるであらう。本論文は革新主義者達が従来の見解とは逆に、帝国主義を熱烈に支持し、或は少くとも喜んで之を迎えたことを立証し、同時に革新主義と帝国主義とは理念的に共通し、同一のプログラムの対内的並びに対外的展開の姿であつたことを論ぜんとするものである。著者 Leuchtenburg についてはコロンビア大学のアメリカ史准教授であること以外は詳かにしない。

著者は先ず、革新主義者が同時に猛烈な帝国主義者であつた典型としてA・J・ベバリッジを挙げる。二〇世紀はじめの一〇年間に、彼以上に革新主義運動に貢献した上院議員は無く、数々の社会立法の提唱とともに、一九一二年革新議員を率いて共和党を分裂に導き、選挙後革新党の妥協的傾向に最後まで闘つたのであるが、熱烈な帝国主義者としての彼は、彼自身の提唱した諸改革がウィルソンによつて具体化したにかかわらず、ウィルソンをその柔弱な外交政策の故に非難するに至つた。ウィルソン政府を前に革新主義と帝国

主義の選択に迫られて、遂に決定的に後者を撰んだベバリッジは、一九二〇年には組織労働者をアメリカ制度の敵として非難するに及んで革新主義者としての自分を死滅させたのである。

米西戦争の勃発に際して国内の社会的改革並びに民主主義の進展と帝国主義との間に矛盾を感じた人はほとんど無かつた。しかしキューバの解放がアギナルドの蜂起という現実となつて現れた時、H・S・ビングリー等小数の革新主義者は反帝国主義勢力に移つた。

しかしはじめから終りまで反帝国主義運動の主導力となつたのは保守派の人々であつた。

T・ルーゾベルトの大統領就任は帝国主義運動を大きく推進したが、彼のサント・ドミンゴ、パナマ、極東、大艦隊建設等は、大多數の革新主義者の支持を有していた。いわゆる叛乱組 *Insurgents* の中心人物の一人G・ピンシュオートや、一九一二年のニューヨーク州革新党知事候補O・ストラウスはルーゾベルトのパナマ政策を擁護し、プラット修正に反対票を投じたのはわずかに二名に過ぎず、ルーゾベルトのドミニカ共和国関税局の差押えは革新主義者の一人として之に反対したもの

はなかつた。ルーズベルトの下でトラスト告発の任にあつたC・J・ボナベルトは彼の巨棒外交を讃え、一九〇五年海軍長官に任ぜられて、彼の大海軍建設の主張に完全に同意であると述べた。議会に於ける反海軍ブロックはやはり保守派であつた。

革新党結成への決定的踏み切りとなつた、上院のN・W・オールドリッチ支配に対する革新主義議員のいわゆる叛乱 *Rebellion* は、従来言われて来たようにベイン・オールドリッチ関税をめぐつてのものでなく、一九〇八年のルーズベルトの四戦艦建造案をめぐつてであつた。投票に於いて、二人を除いて革新主義議員は同案に賛成し、これを機に上院議員の五分の二はオールドリッチを見捨てたのである。

一九〇九年以降の四年間、彼等はタフトのドル外交に直面した。しかし彼等のタフトに対する攻撃が、ドル外交から生じたことは一度もなかつた。一九一二年革新党結成大会が開かれていた間、タフトはニカラグワに海兵隊を上陸させていたのであるが、新党の綱領にはタフト外交非難の語は何一つ現われなかつた。更に彼の仲裁裁判条約とメキシコ政策

はいずれもルーズベルトの怒り呼んだ。彼をして「政府のすべての誤つた行動の中で外交に關しての誤り程大なるものはない」と言わしめたタフトのこの「軟弱外交」は一九一二年の革新主義議員の共和党脱党の大きなモメントであつた。

ウイルソンの登場と改革の進展を前に、革新党は、ウイルソン勢力に加わるか、或はウイルソン以上のラジカルな改革のプログラムを提出して党を守るかという、重大な対決に迫られた。しかし彼等はこの対決を、外交問題に於てウイルソンを攻撃するという道にのめられた。革新主義運動史上はじめて外交問題がその方向を決定することとなつた。彼等はウイルソンを、コロンビアとの謝罪並びに賠償条約、ブライアンの冷却期間条約とメキシコからの撤兵、アルゼンチン、ブラジル、チ

リの三国国際会議へのメキシコ問題の調停依頼等について、「アメリカの名誉と利益を放棄した」と攻撃したのである。パナマ運河通行税の廃止についても、彼等のはとんどが頑強に反対した。

一九一四年革新党は元來の改革的条項のはとんどを削除した、高保護関税要求の声明を

發した。翌年秋には内政問題は彼等のプログラムから全く消えうせ、新たに軍備拡張論が提出された。革新党全国委員会議長V・マードックは、「党は、何よりも先ず、ビジネスの悪弊を除去するための建設的計画、正当な保護関税政策、社会正義、軍事並びに産業の

両面に於ける徹底した準備の要求を提出する」と声明した。かくして一九一六年の革新党綱領は徴兵制を除いて共和党のそれと全く変らず、そのほとんど全条項を戦争準備、アメリカニズム、ウイルソン外交の非難にすぎ、二十五万の正規軍、強制軍事訓練、世界第二位の海軍を提唱し、党自体、共和党大統領候補C・E・ヒューズを支持するに至つた。帝国主義と軍国主義とが自由主義的な抗議の公式にとつて代り、一年を経ずして党は死滅したのである。

ではかかる国内に於ける民主主義推進と海外に於けるその無視という分裂、帝国主義による革新主義の破壊を説明するものは、一体何であるか。

第一に大多數の革新主義者は国内政策と外交政策が盾の両面であると確信し得た。米西戦争はキューバに自由をもたらず戦いであつ

たと同時に、戦争に反対するウォール街の貪欲に対する十字軍であつた。又強制軍事訓練は富裕者の牛耳る民兵制に代つて、「階級と地域の偏見を打破し、……あらゆるグループを活気あるアメリカニズムに統一する」ものであつた。

第二にT・ルーズベルトが革新主義者に有した驚くべき把握力が、彼等の帝国主義承認を説明する。ルーズベルトは彼等にとつて単なる政治的指導者以上の、神格的存在であつた。

第三に彼等の強い人種の偏見が、帝国主義承認を容易ならしめた。ルーズベルトは南部革新党を白人の党ならしめんとする政策を固執し、党大会への黒人代表の出席は拒否された。東洋人及び南東欧系移民に対する態度も又決して好意的ではなかつた。

第四に、最も重要なことは、帝国主義と革新主義は同じ政治哲学、J・デューイの指摘した如き、行動を手段を無視して結果から判定する傾向、アメリカ民主主義の使命に関するほとんど宗教的な信念に支えられていた。合衆国の拡大は、それ自体民主主義の拡大であり、この使命をわずらわしい慣例に捉わ

れず迅速に断乎として遂行する人物が要求された。革新主義の政治理念はハミルトンの積極的政府、国内及び国外に於て国民の運命を積極的に開拓してゆく強力な政府の概念を基礎としていた。之に対する敵は州権論であり制限された政府の概念であつたが、それは国内的には富裕者の支配を、対外的には狭い孤立主義政策を意味した。同時にそれはアメリカ民主主義の使命を否認し、後進諸国民を専制王朝と植民地搾取の下に放置しておくのであつた。かかる政治理念によつて、帝国主義と革新主義を最もよく関係づけたのはH・クロリーイであつた。アメリカの国内政治を国際的視野で捉えた彼は、ルーズベルトの行動を一貫した政治哲学に整理し、帝国主義的冒険は国民的改革の重要な局面であり、アメリカ生活の完成に向う足掛りであると論じて、革新主義と帝国主義との統一のために合理的理由づけを提供したのである。

以上の如く帝国主義に対する態度から見るとき、革新主義は新しい社会のために旧制度の廃棄を目指す試みではなく、すぐれてアメリカ的な伝統と理念に立つて、世界的強國としての中産的アメリカの躍進を歡喜をもつて

受入れたものであつたと言える。それは普遍的な目的を持つものでなく、アメリカの特殊な政治的經濟的害悪を除去せんとしたものに過ぎない。又普遍的な万人の権利によりも、アメリカ人の生活により関心を抱いたのである。かくて革新主義者達は、国内では過剰利得と低賃金の故に大資本家を攻撃しつつ、アメリカの海外投資拡大を強力に押し進め、一九〇九年差別的関税の故に共和党を脱党しながら、一九〇六年には国内市場の削減を恐れ得たのである。革新主義運動は人道主義的価値と国民主義的大望の矛盾に苦しみ、積極的国民政府の理念に於て、手段としての國家と目的としての國家の区別を見失ひ、帝国主義的外交の承認のみならず、国民主義的大望の中に党自身の死滅に至つたのである。

革新主義運動と帝国主義外交を有機的関連に於て捉え、それを通じて革新主義を理解せんとする、以上の如き著者の問題提起は、たしかに行われるべくして行われなかつた問題であると言えるが、外交と内政の關係という常に困難な問題の故に尚多くの問題点を感じし

める。国民的利益や、現実政治の問題をしばらく置くとしても、著者の言う帝國主義的行動の概念が不明確な点が先ず指適されるであろう。レーニンの掲げたメルクマールを著者に要求すべきでないとしても、少くとも、例えばパナマ運河通行税に関する問題を、多額の鉅業投資を有していたメキシコに関する問題と同列に置くことは許され難い。従つて著者があげた革新主義者の帝國主義的行動は尚充分の検討が必要であらう。この点更に、著者が一度も言及していない独占資本の役割とその革新主義運動との關係が、帝國主義と革新主義を結ぶ決定的中間項として設定されるであらう。ルーズベルトの終止変らぬ支持者

であり、F・マンゼイと共に革新党の唯一の財源であつたG・W・パーキンズがモルガンのパートナーであり、一九一五年海軍連盟の指導者中少くとも七人がモルガンと關係をもち、又徴兵制と政府と実業との協力を提唱した国民防衛協会の委員中九人が金融産業界の指導者であり、モルガン自身多数のいわゆる愛國組織に名を連ねていたこと等、この接近の可能性を予想させる。同時にルーズベルトの新國民主義の理念は、之を直ちに帝國主義

と結合せしめるよりは、独占資本の受容性を通して、それを見た時、より説得力をもつものとなるのでなからうか。

次に革新主義なる語が著者に於いては一九一二年革新党を結成した、従つてルーズベルトに代表される運動にのみ關して言われていることが注意されねばならない。ウイルソンの新自由主義の系列をも含めたより広い層の本論文の考察外に置かれては、革新主義運動全体を見渡す時、ウイルソンのな従つてジェファソンの伝統に立つ革新主義者の存在は、新國民主義を自覚した革新主義者よりも、少くとも二〇世紀初頭に於いてはより重視されるべきものでなかつたか。従つてルーズベルトに從つた人々の中にすらこの系列に立つと見做される人々が存在するのでないか。

この点に於いて、ルーズベルトは外交問題に於て孤立していたとする従来の説は尚更めて考えらるべきものを持つと言えよう。同時にこの点は、アメリカの孤立主義の伝統とも関連する。この伝統が反帝國主義運動の大きなモメントであつたことは明らかであり、しかもそのアメリカ制度の優越性に関する信念に於いては、帝國主義者と共通していたことを

考える時、この伝統が如何にしていわゆるモノロー主義の新解釈乃至は帝國主義に転じて行つたかを考えることが問題とならう。そしてここに再び独占資本と新國民主義の關係がとり上げられるのではないか。

其他、ルーズベルトやウイルソンの現実政治家としての面、移民問題等、尚幾つかの疑念が感じられるが、いずれにせよ先に述べた如き著者の問題提起の方向が今後の研究にとつて大きな意味をもつものであることは否定し難い。

——志邨晃佑——

Pierre Gouyon: The Tropical World

Its Social and Economic Conditions
and its Future Status (Longmans)
1954

本書は Gouyon の原著 *Les Pays Tropicaux*, 1948. の英訳 (訳者は E. D. Laborde) である。著者は現在 Collège de France 及び Université de Bruxelles の教授を兼ねるが、戦前

には数年に亘つて仏領インドシナにおいて研